慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本民俗學(中山太郎著, 大岡山書店發行)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.4 (1930. 12) ,p.159(691)- 160(692)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19301200-0159

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

俗に似た類語を發見して人性の普遍性を今更ながら感嘆するだらう。今泉氏の勞苦で此良譯書が讀書界に提供されたことを心から祝し、弘く同好の士に推薦したい。（大岡山書店發行價壹圓八拾錢）、松本信廣）

日本民俗學（中山太郎著　大岡山書店發行）

日本の民俗學界にその人ありと知られた中山太郎氏の論文を彙集せしもの、神事篇・風俗篇・歴史篇・隨筆篇の四に分類されてをる。今その前三篇を手にすることが出來たので此處に簡單な紹介を試みやう。

著者の序文中に斷つてをる樣に此分類は明確なものでない。例へば歴史篇の中に含まれたゑびす神異考、本邦に於ける高媒信仰、一つ物の研究等は、寧ろ神事篇に屬すべきものである。著者は民俗學に於ける先達者の一人であり、多種多樣の方面に興味ある資料を蒐集されてをる。その論文は、種々なる雜誌に掲載されたもの、これを一々探したならば多大の勞力、時間、費用を犧牲にしなければならぬのを大岡山書店の盡力で手頃な書と纒められ出版されたのは、學界にとつて此上ない幸福である。折口氏の「古代研究」と云ひ一書肆の努力が學界の進歩に貢献してをること多大なるを認めねばならぬ。たゞ忌憚ない批評を加ふれば本書の題名は日本民俗學研究とでもしてゐたゞきたかつた。日本の民俗學はなほ生成の途上にあり、人なほこれを學問の名をもつて目すべきやを疑つてをる。今までの研究はデヒレッタンティズムのため左右せられる所が多い。眞正の學の組織され、建設せられるのは之を將來に待たねばならぬ。斯學の開拓者柳田先生さへ「民間傳承論」といふ名稱を使用せられてゐるのを見るにつけ、中山氏の論文集が「日本民俗學」といふ名で學界に提供せられたのは、時機尙早の感がある。著者は多くの珍しき資料を紹介され、まことにその民俗學に造詣深いことを示されてをる。たゞその資料から引き出される結論には吾人の承服し得ぬものがまゝある。神事篇にはまづ「雷神研究」に日本に於て重要な此雷神信仰について語り、次に「さんばい考」に於て田神さんばいの名稱は散飯（サバ）の延言なりと論じ、「穗落し神」に於て鶴が稻穗を落したといふ傳說より、日本の稻は朝鮮より來たと論ぜられてをる。「御左口神考」に述べられた諏訪の酒神の研究は極めて興味多い。日本の民俗學はかゝる技術的方面における古代生活の神秘をあばき、もつて史家の迷夢を醒ますべきである。「宮座の研究」に於ては氏神が產土神にかはる時氏子が新移住民と區別せんとしたる特權ある組合をさすなるべしと論じ、宮座についての種々なる資料を列擧され、「惡口祭」は、冬季における此特異なる祭について述べ、「動物犧牲考」は、原始宗教の重要なる痕跡と思はれる動物供御の資料を集め、「氣多神考」に於ては、ロシア語さけをケタといふことより、氣多神は、鮭なりとて、鮭に關する材料を紹介されてをる。著者の列擧される資料は吾人にとつて甚だ重要であるが氣多神を鮭なりとする理由は吾人を納得させがたい。その他「神の裁き」にオルダリーの材料をあつめ、「物の周を廻る民俗」に日本の神儀に大切な此習俗を論じられてをる。「風俗篇」に於ては「蟹守土俗考」にヒコナギサ尊の生誕

にあたり蟹を這はしめしは、蟹が靈的動物として崇敬せられ、產兒が蟹の如く幾度となく生命を更新して、永く健全であれかしとの禁厭の意に出たものならんと云ひ、「砂撒き」には土の信仰を女子元服考」には主として湿齒の習俗に就て述べ、「動物の子孫」「痣の遺傳する話」「動物に扮する舞踊」は、何れもトーテミズム研究者に興味深き資料を供給され、「日本民俗源流考」は日本の古俗の北方民族のそれと似たものを列擧されてゐる「歷史篇」に於て「魏志倭人傳の民俗的考察」は、極めて興味ある研究なれど、是等の土俗九州に限られたるものならざるが故に耶馬臺は九州よりも近畿なるべしといふ結論は少しく當らない。大和でなければ存せぬ特異な風俗をあげ、それと倭人傳の記載と合致せる時にあらざればかゝる結論は、氏の論文からひくことはかたいであらう。「日置部異考」は、上代に於ける火の崇拜について語り、「遊行婦考」は、遊部より巫女出で、その遊女となりし歷史を述べ、「座源流考」は、商業上以外の座の意味を說明し、「神社と商習慣」は宗教と密接な關係ある市の研究をなし、「本邦に於ける高媒信仰」は、日本の原始結婚形態に關する興味ある記事をあつめ、「一つ物の研究」は、頭に鳥の羽をさす風について考證し、「ゑびす神異考」は、日本に於ける鯨の崇拜について多くの材料を擧げてをる。これは著者の論文の中最も學術的功績あるものゝ一つであらう。たゞしゑびすといふ神の起原は鯨なりといふ命題には直ちに贊同し難い。日本盲人史の一節」は、當道派と地神盲僧派との爭ひについて述べ、最後に幕府の盲僧壓迫の內情にはキリシタン迫害の因もあらんと論ぜられてをる。この外氏の揭載された論文はまだ多々あるが割愛して紹介の筆を置く。若輩の身として先進者の書にとやかくの筆を弄した罪を深く御謝びする。なほ此書再版の時訂正していたゞきたい誤植が二三ある。「神事篇」二七八頁のトーデミズムはトーテミズムに、「歷史篇」一九三頁ウエスター・マルクはウエスターマルクに二二四頁佛人レビ・ド・ブリュクは佛人レビイ・ブリュールに直していたゞきたい。（「風俗篇」三一九頁に叙及されたエリセーフ氏がボルシエビーキに殺されたと云ふのは勿論戰爭當時の誤つた風聞で同氏は目下パリーに滯在されてゐる）。（以上一九三〇・一二・一四、松本信廣）

後法興院記

（平泉澄博士校訂出版　發賣所　至文堂）

公卿日記の類が國史研究上缺く可からざる史料なることは言ふまでもなく、しかも他に採る可き史料の豐富ならざる時代に於ける場合の如きは殊更である。

既近、平泉澄博士等の努力によつて世に出されたる「後法興院記」の如きも實に此の點に於いて寔に價値ある史料と言ふ可きである。即ち、本書は從一位關白太政大臣近衞政家の日記にして、時代は戰亂に次ぐに戰亂を以つてし應仁文明の世を含むその前後である。而して、日記は全部三十卷、後土御門天皇の寬正七年（二月二十八日を以て文正元年と改めらる、即ち政家二十一歲の時なり）正月より後柏原天皇の永正二年六月四日（此の年六月十九日を以て政家薨ず、六十二歲なり）に到る四十年の長期に亙るものにして、その間文明元年より同十年に到る十年間及び文明十七